九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

百年の交誼

上野，洋三

https://doi.org/10.15017/4755955

出版情報：雅俗. 2, pp.66-74, 1995-01-10. 雅俗の会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

百年の交誼

上野洋三

池の上を舟で行くと、中の島に亀が甲羅を乾しているのが見えた。陽ざしは初夏を思わせるが、池辺には刈込みのつつじが紅い花を盛んに見せているむこうに、桜も咲き残っていて、今日の日を待っていてくれたように思われる。船の中は、親王とただ二人で、時折遠く桂川から渡って来る風が、桜の花びらを吹きあげて、池の水面に舞い落ちる様は、信じがたい幻を見ているようである。道中は、菜の花の咲き揃った間を、延々と黄金の敷物でも踏み分けるように進んできたのであった。そのことを親王に申し上げると、歌にして戴けませんか、と仰言る。それはとても、そもそも菜の花を詠んだ和歌など見たこともありません、と辞退するが、性格のしっかりした所を内に抱えている親王は、微笑を浮かべたままで、眼差しに力を入れて、こちらの眉間のあたりをゆったりと見ている。致しかたなく、とりあえず、口をついて出るままに一首を申し上げた。

くちなしに野べを染めなす花もまたこと葉の花のたねとりてみむ

親王は、眼の底から満足そうな笑顔になり、ふり返ると船を操っている老人に向って、月波樓の下に着岸するように、と命じた。

樓は、池を隔てて東方を望み、登ってくる月を待ちうけるように位置している。今日はまだ卯月の四日。満月にはなお日があるが、池水にキラキラと反射する月光が、この建物を包むさまを想像すると、やがて次の歌は自然に心に浮かびあがった。

名もしるし舟もかつらの棹さして暮れなば月の波にあそばむ

再び船に乗って、水面を吹く風を楽しんでいると、急に強くなった風が落花を巻きあげて、頻りに散り落ちる花片は、船中にも及び、親王の肩にも膝にもとどまった。一ひらを掌に置いた親王の視線が、一瞬、遙かなものを想起するように変ったが、それきり何も口にせず、今度は東岸に上陸して松琴亭に導かれた。

後水尾院が姫宮や法親王など、多勢のお伴をつれて、寛文の頃、当地に行幸になりました、と親王は再び遠い眼差しで語り始めた。それで、先刻発せられなかったことばが了解されたのだが、それは寛文三年（一六六三）三月六日、前日の雨が漸く晴れた日のことだった、という。長い歳月をかけて、この別業の普請経営に苦心した天香院（智忠親王）が前年七月七日に亡くなって、金剛寿院（穏仁親王、後水尾院第十皇子）が八条宮家第三代となった頃のことである。すでに六十八歳になっていた後水尾院は、しかし頗る壮健で、前日来増水している桂川で船遊びをしようと船を出したところ、大水に大風まで加わって危険になり、仕方なく庭園の池に戻ってきたのだけれども、それでも上機嫌は変らなかった。折から満開の桜を、相伴の鹿苑寺承章が詠じて「白桜爛漫雪乾坤」とせっかく大真面目に詩を提出したのに、

誘引桂宮先納言　桂の宮に誘引するは先づ納言。
烏丸中院又東園　烏丸、中院、又東園。
花時漸過期秋月　花の時漸く過ぎなば秋月を期す。
莫謂路遙吾宿坤　謂ふなかれ、路遙なり、吾宿は坤と。

などと狂詩で応じて、一座の頤を解いた、と伝える。あの「烏丸」は天通院ですね、と親王が念を押す。

度々の火災で記録を失っているので、只今のお話もはじめて伺うようなことばかりである。寛文三年であれば、当時権大納言・正二位の資慶（法号天通院仙岩芳公大居士）に違いない。ついでに「中院」は、正三位権大納言、渓雲院通茂であり、資慶は四十二歳、通茂は三十三歳、ともに翌年には後水尾院から古今伝受を賜る頃である。万治二年（一六五九）から始められた後水尾院じきじきの指導になる御点取は、寛文二年まで足かけ四年、三十回に及んだが、通茂・資慶はその「御人数」の内に加えられ、詠歌の厳しい指導を受けた。

あの御点取には金剛寿院様もご参加ではありませんか、と訊ねると、そうです、寛文元年の冬からのほんの数回に参加して居ますが、それでも、後水尾院の批評・添削の前では、惨憺たるものですね、と親王の声に嘆きとも賞讃ともつかぬ力が籠った。ほんとうに、あの寛文元年十二月二十一日の「月前雪」の題では、全員不合格で、

「此題、何事もあるべき也」

と、院のニベもない批言が一行。少し工夫すれば、何だって出来るのに、という院の叱責が下に聞えて、万雷のように後頭部を打つ。幸か不幸か、曽祖父資慶はこの回に闕席であったが、式部卿宮穏仁親王は、その洗礼をまともに受けたのであった。しかしながら、その穏仁親王が弱冠二十三歳で、寛文五年に亡くなられたのは、後水尾院にとっても、まことに痛恨の思いであったに相違ない。いや、曽祖父天通院資慶にとっても、院の和歌会や連歌の会に、しばしば同席して親しく言葉を賜った金剛寿院様は、大切な和歌の道の同行でありました。たまたま家に伝わる紙片を整理して居りましたところ、このようなものを見出しましたが、これは金剛寿院様のことではありますまいか。

式部卿宮八条殿より御山里の松を賜りて、行末ちとせをかけて伺候候らへ、と頼み置かれ候よし、この秋も御ともなひあるべき、など仰下されしに

此松の変らぬ色をしるべにて山路に千代の秋は契らむ

わが家には、この山荘から頂戴した松があるのです、と申し上げると、親王は、小さく息を吐いて、それにしても、資慶卿もまたあまり長命ではありませんでしたね、と訊ねた。

金剛寿院様のあと四年後に四十八歳で亡くなりました、もはや六十年の昔になりますが、あの万治・寛文の御点取のころ、「夏月易明（なつのつきあけやすし）」の題で、

あくるよををじかのつののつかのまもなつのの露にやどる月影

と詠んで、院の長点を得たことを終生の栄誉として居ったそうです、と応えるまもなく親王は、そうそう、あの厳しい『万治御点』の中で、院の長点を得たのは、あとにも先にも、あの一首だけだったのですね。いまもあの御添削の書物を開きま

すたびごとに、開巻まもなくの万治二年五月十六日の、最初の「夏月易明」を拝見しますと、その終りに並んだ「あくるよを」の頭に、長く短く引かれた二本の点を見て、目頭が熱くなります。資慶卿は、幼年の日から歌才にすぐれた方だったそうですが、あの長点は、卿にとっても中間の労苦を一挙に消し去ってくれるようなものだったのではないでしょうか。

そうですね。寛永十五年（一六三八）の七月に光広が亡くなり、九月に光賢が亡くなって、資慶は、祖父と父を失ってしまいましたが、その時はまだ十七歳でした。それまでは法雲院光広の庇護のもとで、父とともに伸び伸びと生活して居りましたから。幸いに後水尾院のお心遣いが陰に陽にあって、たゆまず和歌に精進集中すべく環境が整えられていたのは、曽祖父にとって有難いことであったと思います。せっせと宮中の歌会にも詠進して、学んでいったのであろうと思います。ただし突然に世間と対して、とまどいも焦りも当然あったことでしょう。承応二年（一六五三）、三十二歳の頃には、後十輪院中院通村公の御添削を受けて居りました中に、「冬述懐」の題で、

さゆる夜のめぐみの衣かさねても身を知る雨の袖ぞこほれる

と詠んで「古事など候か。曽不覚悟に候」と批判を蒙っています。醍醐天皇が寒夜に御衣を脱ぎ人民の寒さを思ったとか、あるいは『菅家文集』の「恩賜御衣今在此」とか、「古事」はさまざまに想像されますが、いずれに致しましても、「本説・本文・詩の心・物語の心、さのみ詠むべからず云々」（『愚問賢注』）の議論が古くからあって、古事・本説はうっかり詠んではならぬ、本歌取りよりも一段とむつかしい所であった筈です。その辺の呼吸は、肉親の目上に細かく接触しているうちに意外と易々と身につくものなのでしょう。天通院は、それが中途で失われたので、三十歳を過ぎてもなお後十輪院の鉄鎚を受けなければなりませんでした。

親王は軽く首肯して、宮廷一体の切磋琢磨があるといっても、ほんとうに呼吸とか頃合いとかいうことは、身内の空気でないとわかりませんね、と独り言のように語ったあとで、わが宮家も、三代金剛寿院のあと、四代霊照院（長仁親王、後西天皇皇子、享年二十一）・五代無量光院（尚仁親王、後西天皇皇子、享年十九）・六代知恵観院（文仁親王、霊元天皇皇子、享年三十二）と続いて長寿に恵まれませんでした。私で七代となりますが、先代の父君よりは京極宮と宮号も変り、八条宮

智仁親王の歌学の伝統は、なにほども継承されておりません。楽の家には、幼な心に聴いた音色や拍子が耳の底や身体の節々に融けこんで、自ずと体得される所があるといいますが、和歌は、伝えられた書物をいかに読み続けようとも、みずから詠歌の心になろうとすると、手も足も動きません。そのあたりのところは、ほんとうに憚りなく厳しく指摘して導いていただきたいと思っています、と一気に言って頭を下げた。

この年、三十八歳になった光栄は、十四歳も年下の親王が、実はわが曽祖父資慶のことなどよりもこの光栄自身に親近感を抱き、昵懇の指導を求めているのだと理解した。二歳で祖父光雄を、四歳で父宣定を亡くした光栄は、八歳で父宮文仁親王を亡くした家仁親王よりも、さらに父祖の提撕を受ける時間に恵まれなかったが、親王は、むしろ孤軍奮闘して次第に詠歌の才能をあらわした光栄にこそ、みずからの指導者として最適な微細な心遣いを期待しているのであろう。

光栄は、元禄十六年（一七〇三）正月、霊元院の仙洞御所での御会の人数に加えられた十五歳の年から、院の批判を受けることになり、一方で同年七月、詠草の下相談は武者小路実陰にするように申し渡された。八年を経過して正徳元年（一七一一）九月には、以後は詠草をそのまま院に提出するようにと申し渡され、それからさらに十年を経過して享保六年（一七二一）七月には、霊元院から「てには伝受」の切紙を頂戴した。それは、古今伝受の第一段階であり、光栄の歌学の力量が、当代一級の域に達したと、院が証明したものである。そして、翌享保七年正月には、改めて門弟をとり詠草を添削することについての許可が申し渡されたのであった。光栄三十四歳。祖父光雄没の元禄三年以来、三十二年ぶりに「歌の家」が名実ともに復活したわけである。そのような光栄の、苦心の二十年を熟知するが故に、霊元院は、孫にあたる家仁親王の詠草添削をも光栄に托したのであり、聡明な親王は、宮家とわが身に対する祖父法皇の期待を十二分に理解して、みずからが光栄から、とりわけ何を学ぶべきかを鋭敏に考察していた。

法雲院光広は、曽祖父資慶が初学の頃、歌というものはとにもかくにも沢山詠むのが稽古というものだ、と教えたそうです。そのことを祖父光雄の書き残したものの中に見出しました時に、わたくしは、血縁の指導の有難さも限界もまざまざと見る思いが致しました。詠歌というものは、実作を間にはさんで互いに詞の順序やら趣向を実地に動かして見ないと、納得

がゆかず身にもつかぬことです。そしてまた、教える立場の者も、提出された歌によって自分の力量を試され、さらに磨きあげられるのです。稽古は、一首を媒介にして師弟たがいの稽古です。わが家に残された父祖の教訓は、書物としては微々たるものですが、光雄が何故にあのように解りきったことを書き留めたのか、最初、理解できませんでした。しかしながら、霊元院をはじめ実陰公・中院通躬公などの、心のこもった御添削をまのあたりにさせて戴いておりますうちに、わたくしには、祖父があのようにわざわざ書きつけて、自他の戒めとした意向が、ほのかに見えたように感じました。「兎角、歌をいかほどもよむを稽古とは申」と、光雄は記して居りますが、なんと直截で、大胆な、そして余す所のない法雲院の提言でしょう。

ゆっくり途切れながら話す光栄の声が、少し大きくなりながら珍しく感情をあらわしかけているのを聞いて、親王は、しかし逆にこの壮年の師のうちに鍛えあげられた謙退の心を、ゆるぎない礎のように確認した。心を低くしなければ、歌を詠むことも、他者の歌を添削することも、古歌に学ぶこともできない。そのことを光栄は、幼年の頃からの心細い宮廷社会の交りの中で、感謝とともに一つ一つ心に刻み、身につけてきたのであった。

わたくしは、切磋琢磨の意味を軽薄に考えておりましたね、と親王は言って、光広卿の言葉は、ただいまのお教えと共に肝に銘じておきましょう。ほんとうに、光広卿というお方は、率直な心の持主と思いますが、実はあの力強い『黄葉集』の歌の数々も、不断に心を鋭ぎすまして行く精進の上に生まれたのですね、と、光栄の感情の揺れをなだめず煽らず、話題を法雲院の方に転じて行った。

当宮家を開かれた桂光院様（智仁親王）が亡くなった時、寛永六年（一六二九）四月に、光広卿が追悼の和歌を献げて下さいました。即ち「むけほうしゆ」（無価宝珠）の六字を歌頭に置いた六首です。その第五首は「したふよりあまりわりなき夏の夜の月の桂の光とやみむ」。この歌の趣向は、さきほどの資慶卿の歌の題「夏月易明」にあるのでしょうが、それはともかく、第二句の「あまりわりなき」という不思議な措辞を、光広卿は寛永十四年（一六三七）の院着到百首の「夏月」の歌でも用いていますね。「つくづくと見てこそ月は惜しまるれあまりわりなき夏の夜の空」。あの句には何か作例がある

のでしょうか。

光栄は、あれは確か、と言いさして一瞬の間を置いたが、その間は不確実な記憶を確かめるためではなく、飽くまでも知識というものが性急に求められてはならないということを自戒するためであることは、すでに落ち着いた声色に読まれた。逍遙院三条西実隆公の『雪玉集』に「初逢恋」の題で見える「行末をいかにかけまし思ふにもあまりわりなきさよの手枕」をふまえているのだと思います。逍遙院のような近代の作を持ってくる所が法雲院の大胆な所だと思いますが、と続けながら光栄は手元に引き寄せた包みの中から、列帖装の横本を取り出し、パラパラとめくって確かめた。それは細かな文字で埋められた小冊であるが、ところどころに見出しのイロハが見えて、あきらかに手づくりの歌語辞典のように見受けられた。親王の視線が、紙面に及んでいるのを意識して光栄は、まことに恥ずかしいことです。寛永の頃には、禁中・仙洞の当座歌会の折に、誰やらが扇に歌枕を書きつけて置いて覗いていたのを、一座の者に笑われたそうです。三条西実条公は定家仮名づかいを記した一冊ばかりを懐中して、歌書など一切持参しなかったそうですが、わたくしは記憶に自信がなく、いつの会にもこのようなものを持参して居ります、と弁解しているが、記し留められていることどもは、よほど珍しい例にちがいなかった。

いや、おかげで法雲院の桂光院追悼の志が改めて深く激しいものであったと理解されて、ありがたいことと存じます。あの一首に感じられた号泣に等しい悲嘆と、それを厳しく削り込んで行く意志の力と、二つながら圧倒されるようです。さすがに法雲院は玄旨法印幽斎が「門弟之中第一」とされた方ですね。

親王の言葉が終るのを待って、光栄は、法雲院の『黄葉集』が持つ力感に満ちた詠みぶりは、慶長・元和・寛永の人々が持つ共通した「風躰」であろうと思います、法雲院は、桂光院様についで幽斎の古今伝受を継承しました、と些か口調を早めて語り出してから、ふと口を閉じて、やがてもう一度、語り出した。この順序が大切なのです。そして、桂光院様から後水尾天皇に古今伝受が行われたのは、それからさらに二十二年も経った寛永二年（一六二五）のことです。この順序も大切なのです。幽斎が桂光院様に古今伝受を行った時は、錯雑した伝受の諸流を綜合して相伝すべき第一の人として桂光院様に

托したのです。桂光院様は「門弟」としてではなく、和歌の道の継承者として最もふさわしい方だったのだと思います。そして法雲院は、どこまでも「門弟中之第一」なのです。幽斎に対しては、二人ともいわば相弟子のように見えますが、法雲院から見れば桂光院様は、全く段違いの方だったのです。追悼の六首が、恋歌に通う措辞と、截然たる決意にみちた力をみせるのは、二人の間のそのように格段の和歌を介した関係があったのです。桂光院様がお亡くなりになって以後は、ご存知のように後水尾院様の英邁な決断とご指導が和歌を今日のありように導きました。しかし法雲院が、桂光院様に抱いた親愛感に満ちた敬虔な感情は、今日の歌のありさまからは想像できない熱意にあふれていたものと思います。

まことに、桂光院と光広卿といい、金剛寿院と資慶卿といい、わが宮家と貴家とは百年もの間、縁をむすんでいたのですね。何という深い和歌の契りなのでしょうか。この度またご指導を賜ることになって、本日はわざわざこの山荘においでいただき、これほど嬉しいことはありません。家仁親王は、心から嬉しそうに、ゆっくりと噛みしめ噛みしめ、そういうと、一首、

いにしへの跡あるままにさそひきて河辺の宿に契るいく千代

とさし出した。資慶と金剛寿院との贈答の「山路に千代の秋は契らむ」を受けているのであろう。実は光栄も、先刻、親王と二人での舟の上で、

ともにみる恵もふかき池水に千世も小舟のさしてちぎらむ

と心中に詠じたのだが、それは披露しなかった。かわりに親王の詠歌に対する返歌として、

かきつばたむかしへだてぬ色までも代々の契りのふかき池水

とさし出した。

桂川の河辺に幔幕をはってあるあたりが賑やかになってきた。里人を催して今日の見物（みもの）に鮎をとらせて見せるのだそうだ。後水尾院が果たせなかった河遊びが実現しそうである。親王はこの日、その後は、心からくつろいで伸び伸びと和歌を詠じ、十二首にも及んだ。光栄が、この日の後も、全く変らぬ態度で、親王に対する敬愛と厳しい指導とを以って、「切磋琢磨」

に励んだことはいうまでもない。享保十一年（一七二六）四月三日のことであった。

光栄は、その後さらに二十二年を生きて、延享五年（一七四八）、六十歳の生涯を閉じた。親王は、光栄におくれること十九年、明和四年（一七六七）に六十五歳の生涯を閉じた。二人が近世和歌史の曲り角にあって果した役割は、堂上和歌の最後の光芒といってもよいであろう。以後もなお宮廷の歌人の中から優秀な指導者は出なかったわけではないが、宮廷の和歌のありようは、やはり後水尾院の宮廷が定めた枠組みの中で悪戦苦闘を続けたように見うけられる。